



ふえき

時代を超えて変わらないもの

91

公益財団法人 堀武教育文化振興財団
機関誌「不易」

財団の次の10年を考える

ゴールではなく、

ベクトルを提示する対話



福武教育文化振興財団理事長

松浦俊明

まつうら・としあき 愛知県名古屋市生まれ。横浜国立大学工学部卒。大手IT企業勤務を経て、2017年から公益財団法人福武教育文化振興財団の理事長。

国際教養大学准教授

工藤尚悟

くどう・しょうご 秋田県能代市生まれ。国際教養大学国際教養学部グローバル・スタディーズ領域准教授。東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了(博士・サステイナビリティ学)。専門は、人口減少時代の持続可能なまちづくり。

文・写真 才士真司

(国立大学法人岡山大学学術研究院教育学域《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座*1》特任准教授)

見頃を迎えようとする蓮が堀を埋め尽くしている。7月11日の朝。秋田市は、低い雲が空を覆っていたが、中心市街地にある千秋公園では、そぼ降る雨が蓮の大輪に触れて淡く輝き、大勢の人が花の様子を楽しんでいた。



ハスと浮橋型遊歩道 ~ ハスを眺めた遊歩道を手がけたのは、岡山県民にも馴染み深い、奈義の現代美術館を設計した磯崎新さん(1931-2022)に師事した秋田公立美術大学の小杉栄次郎教授だ。

共に向き合う研究者で、観察の名手だ。そんな工藤准教授の著作に出会い、対話を望んだ松浦理事長が携えてきた問いは、設立から40年、岡山の教育と文化を支えてきた福武教育文化振興財団が、次の10年をどう考えるか、というもの。どんな対話が行われるのか。



秋田市文化創造館 ~ 1967年に開館した旧秋田県立美術館を再生させた文化施設。同館が2013年に移転・閉館した後、建物の解体が検討されたが、市民の保存・活用を求める声に秋田市が方針を転換。その活用をどうするかという対話の場、ワークショップが幾度も重ねられ、2021年3月に開館した。

この日、福武教育文化振興財団と岡山大学国吉康雄記念研究寄付講座*1の取材チームは、公園の堀端に立つ秋田市文化創造館に向かっていた。

日本初の公立大学法人である国際教養大学秋田市雄和(の)工藤尚悟准教授と、今年設立40年を迎えた公益財団法人福武教育文化振興財団(以下、財団)の松浦俊明理事長との対話が行われる。

工藤准教授は、地域社会が続いていくとはどういうことかという問いに、秋田市から北に車で1時間ほどの五城目町*2に入り、地域の課題に住民らと

このステージとなる秋田市文化創造館は「出会い、つくり、はじめる場」を掲げる文化創造の拠点だ。

今日の対話にふさわしいのではと、ここでの対話を希望した工藤准教授に、松浦理事長は、財団のこれまでの活動と現在地への評価を示した。

福武教育文化振興財団の問い

松浦理事長は財団の活動を、時にデータを交えて、極めて端的に紹介しながら、その活動が「岡山にとってどういった効果をもたらしてきたのかを十分に検証してこなかった」と、この対話で模索したい動線を示した。

組織のトップである人物の、課題の現在地を隠すことなく示そうとする姿勢に、工藤准教授の柔和な面差しは、聞き入るように前のめりになる。

その反応を確認した松浦理事長は話を続ける。「人口減少をはじめとする今後の社会の変化を捉えた上で、それらを事業に落とし込んでいるかというところではなく、財団の助成事業は単年単年の積み重ねになってきた。だからこそ、設立40周年を機に財団の立ち位置とビジョンを、職員の共通認識として据え直したい」

松浦理事長は、財団は自ら地域に入っていく性格の組織ではないといい、地域で活動している団体を支援するという立場を強調する。それは、良質な活動をしている人たちが、それぞれの集合体が「良いコミュニティ」を作ってくれば良いという思いで試行し、固めてきた財団の姿勢であり、足場だ。

その財団が、岡山と共に歩んできた時間も40年を重ねた。

財団はこの歩みを、このまま進めていくべきなのか。それとも、新たな試みに臨み、フェーズの移行にまで踏み込むのか。

松浦理事長のそんな自問自答のような問いに工藤准教授は応えようと、手振りを交えながら話した。

一 ゆっくり近づく

秋田と岡山。冬が長く、雨の多さと広大な森林が独特の文化と暮らしを育んできた「美の国」と、穏やかな海と厳しくも豊かな山地に挟まれた「晴れの国」。道路距離で約1000km離れた地での気づきと課題を共通言語とするために、工藤准教授が引き合いに出したのは、文化的にも観光資源としても秋田を語る上で欠かせない「なまはげ」だ。



JR秋田駅の改札を出ると「なまはげ」のオブジェが出迎える。

「なくなつてほしくないけれど、自分が「なまはげ」の中には入りたくない」という若者が少なくないという。工藤准教授はいう。伝統行事としての価値は認めつつ、自分が当事者にはなりたくないとする若者を「正直」と評し、里山での暮らし、例えば草刈りや水路の掃除といった手間に対する反応にも似たケースがあることを示した。

私たちは新しい暮らしを起せば、それまでの

暮らしと比べるだろう。すると、小さな、少し距離を感じるものが多くある。地域の場合でも、そうした気づき、その積み重ねが、地域の継承をめぐる課題につながっていくことがある。

こうした実感を、コミュニティーの維持を模索する現場に立ち会うことで体感してきた工藤准教授が大切にするのは、「やるやらないっていうような、イエスノーみたいなことではなくて、なぜそれが続けられてきたのかという「コア」のところにゆっくり近づいていく時間」だという。

地域の担い手として、外から地域に関わる人を紹介する例が、メディアを中心に世間で見られるが、そうした人たちの多くは、はじめから担い手になるつもりで、地域に入ったわけではない。「地域おこし協力隊」のように、求められることに同意した上でのアプローチもあるが、その地域にある、なにかしらへの関心から始まるものだろう。それが移住に繋がり、そこで暮らしうちに自身の、そして地域の課題に気づいた者が、やがて自分でも手を動かすようになる。

こうした時間を工藤准教授は、「ゆっくりと近づいていく」と表現したのだ。

そんな工藤准教授の専門は、サステイナビリティ学[※]というものだ。つまり、「続くことを考える学問」となるのだが、それは、「必然的に閉じ方を考える学問でもある」と工藤准教授はいう。

何かが失われる手前で、「これがもし無くなつてしまつたら私たちは何を失うことになるのか」を普段から語り合っておくことが、「続かなくなること」への備えになり、そして「何を持続したいのか」について自覚的であるために大切なことだからだ。

二 機会に手を伸ばす

次に二人が、対話のテーマとしたのは、地域での教育の機会について。

工藤准教授はまず、体験する機会とその格差について、よく聞かれる前提を問い直す。

都会には体験の機会があり、地方にはない。多くの人がそう考える。だが、種類は違うが機会と同じぐらいあるのではとみる。そして、問題なのは数ではなく、子供や親が機会に手を伸ばせるかどうかだとし、埼玉から秋田への移住者の体験を紹介する。

図書館のこと。小さな子が、ひとり絵本を移住者のもとに持ってきて、「読んでほしい」と差し出した。見知らぬ大人に子供がアプローチできる。そんな光景は都会ではなかなか見られない。移住者はそう感じたという。

子供を親以外の大人がケアをする。してもいい。もちろんそこには、コミュニティーの規模やシステムもあるだろうが、そんな同意がコミュニティーにあり、それが「機会に手を伸ばす力」になるとした工藤准教授は、財団が力を入れる「ハロー！ミュージアム助成」を、この感覚とつながるのではと、問いかけた。

「ハロー！ミュージアム助成」は、岡山県内の小学3、4年生が県内の美術館を訪ね、作品観察や仲間たち、大人との対話を通じて「美術館の楽しかった」を見つけて持ち帰るプログラムだ。美術史的アプローチを促すような、学問的に子供の発想を縛る要素は規定されていない。美術館「このルールや倫理的な配慮は、立ち会う専門スタッフが注意を払うが、

工藤准教授は、こうした気づきも得た研究フィールドである五城目町との出会いを「衝撃」と表現し、その「まちづくり」の特徴を、

- ・まちとつながる場所がある
- ・日々の暮らしをちよつとずつよくする「企て」が起きている
- ・異質なものの（外からやってきた人）が流れ込む（滞留できる）場所がある

とするが、これらを可能にし、維持しているものが、人々の学びを軸とした「まちの将来」を考える姿勢だという。



森山から眺めた雨の五城目町～秋田県中央部に位置し、森林と農村風景に囲まれている。

これらの詳細は、工藤准教授が2025年に上梓した『わたし』からはじめる地方論——縮小しても豊かな「自律対話型社会」へ向けて」に委ねたいが、他の地域とは異なるプロセスの先にある成果を工藤准教授は、強いリーダーシップを誰かが発揮した結果ではないという。

個々人の小さな成功体験の積み重なりがあつて、その先に「ものごと」が「もこもこもこつ」と立ち上がった。地域では当たり前だったものの価値に、「移住してきた方たちとか、訪ねてきてくれた人たち」の視点・アプローチによって地域が気付く場合もあったという。

おしゃべりなど、子供たちの積極的なアクションを促し、館によつては休館日を開放する場合もある。

この「ハロー！ミュージアム助成事業」を工藤准教授は、「私の知っている美術館はこんなことができる場所」と、「一人称で語れる小学生が増えることは、機会に手を伸ばせる子が増えることなのでは」と評し、必要なのは自己効力感[※]がある個人ではなくて、自己効力感のあるコミュニティーだと、地域が課題を解決しようとする姿勢について話す。

誰かがこんなことをやってみようといったとき、「いいじゃん、やってごらんよ」、「それ、やるんだったら手伝うよ」と返せる町。一つひとつの活動がどこへ向かうかより、全体として、やってみてもいい雰囲気が出来上がっていることこそが「最大のアウトカム（成果）」だという工藤准教授の言葉を、松浦理事長が引き継ぐ。

財団では助成採択事業に対して、成果主義的な評価に重きを置くことはない。地域から、文化・教育に関わる何かを始めようという思いが立ち上がるとうとするとき、「福武教育文化振興財団に相談したらいいと思つてもらえる緩やかさを大切にしてください」と。それは、工藤准教授の示した地域の姿勢と重なるものだ。



ハロー！ミュージアム

例えば、カフェをやりたいという移住者が、最初から町の空き店舗を探すことから始めるのではなく、まず、500年以上の歴史が守られてきた朝市[※]という公システムを利用する。つまり、朝市が立つ通りの一区画を300円で確保して、コーヒーを販売するという始まりだ。

1杯のコーヒーを提供する。その繰り返しのおかげで、地域住人や朝市を訪ねる観光客らと対話が生まれ、地域を活かす・自分を活かす商品の開発・改善の機会が重ねられる。コーヒー杯が、大きな一歩となり、地域の営みに加わる事業に育つていった。この「誰かのやってみよう」を具現化する場所がある」ということも、五城目町の特徴だ。



三 直線から偶発へ ・そして風土を意識すること

だが、岡山で財団が示してきた事業のあり方や五城目町のような場合は、計画どおりには作れないだろうと二人は話す。

工藤准教授は、「地方創生」にありがちな疑問を示す。

「でもそもそもその土地の魅力を見つけましょう、それをどうやって皆さんの誇りにしたりとか、地域の経済の活性化にしましょうっていう風に、結構直線的に考えがちなんですよね」

だが、地方に暮らすと、そうはならないと困ったような笑顔をつくる。

「ここに人があって、ここにこの人がいるから、混雑だらけになった」

たとえば、作物を育てていけば、アクシデントを含めた過程を経ることになる。そんな農作業のように暮らしては非常に偶発的だ」と。

よく生きること・暮らすことを直線的に設計するのは難しいのだ。

ここで工藤准教授は、予期せず起こる偶発に向き合うことを「そうせざるを得ない」とし、それが「風土」ではと提示した。

秋田では冬が5、6か月続く。だから夏のうちに保存食を作り、発酵の文化が育った。人はいわば、秋田という土地に「アフォード[※]」されて暮らしている。なら、岡山にも「そうせざるを得ない」ものがあるはずだという工藤准教授は、財団の助成事業で新しい活動が絶えず生まれること―申請の約4割が新規だという―も、すでに財団の助成事業が岡山の風土になっていることの証かもしれないとした。

四 評価をベクトルへ

工藤准教授は、「評価」という言葉を巡るあり方に対して、自分の場合は「前置きをし、評価とは点数をつけることではなく、「その人がやりたいことを引き出すこと」だとした。「指標」の捉え方も同じで、全国を横並びにして測るための指標もあるが、工藤准教授は別の使い方をするという。

「指標って測るだけじゃなくて、方向性を示すんです」前者は測定、後者は原則となる。

外から持ち込んだ物差しで測れば、秋田は多くの指標で下位になる。だが「もしかしら物差しがずれるんじゃないか」と、疑問を持つ。すると、その土地の豊かさを測る指標は、自分たちで作るべきとなる。

工藤准教授は、高知県の限界集落[※]でのまちづくりを考えるイベントに呼ばれた日の気づきについて話す。

その日は雨が降っていたという。年間降雨量が日本最大だと聞いて、工藤准教授がふと思ったのは、「町のことを語る、年間総時間数が最も多い地域」にもなりうるのではないかと。

人々が町を語る総時間が、仮に降雨量ほどに多くなれば、その地域は変わっていくのではという「気づき」を共有することで、その地域らしさを評価する新しい評価軸は、地域で作ることも提案する。そして、「きつとこの町はどんどん変わりますよね」という可能性も示す。

松浦理事長は、財団が持つべき指標は、「ガチガチに固めた議論」で、ゴールを決めてから進めるのではなく、ベクトルだけ間違えないようにしたいのだが」と、工藤准教授に意見を求めた。

工藤准教授は、「そういう順番ではないか」とする一方で、この10年で、地方の側から、地方はこうなりたんだっていう声が、ようやく聞かれるようになって、その「潮目」が変わったと感じることもいう。

そして、「ここからもう次の10年ぐらいかけて、地方像といふかな、地域の将来像みたいなのを語っていくときに、もつと面白い風になっていくんじゃないかな」という風な感じがします」と笑った。

ふたりの対話は、2時間近く続いた。

対話の初めに松浦理事長は、財団のしてきたことが岡山にとつてどうだったかを検証してこなかったと率直に語っていた。今、対話が終わりに近づいて、松浦理事長はもう一つの言い方でそれを確認した。大切に思ってたが、「なんとなくの福武らしさでまとめた」と。

だから、評価を変えながら、いま大事にしたいものを財団らしきとして出していきたいと続ける。

「市民のみんなの『やってみようか』を引き出せるような財団というか、岡山県民がそう思った時に、ふと私たちの財団の名前が思い浮かぶような、そんな存在になっていきたい」

それは、工藤准教授が五城目町を語る言葉と、財団のこれまでの姿勢、40年をかけて築いた土台の上に、次の10年を考えるためのベクトルだ。

今回の対話はその手がかりを余韻に、互いに再会を約束し、ひとまずの終わりを迎えた。



工藤准教授はすぐに

「ベクトルだと思えます」と答える。

「毎年変わるかもしれないが方向性は変わらない。それを示し続け、意図が伝わっていけば」とし、「なんかほわっとこつちだよなって、みんなが思ってる」と、財団のあり方を表現し、共感もした。

次の10年へ

最後に、話は世代による見え方の違いに及んだ。工藤准教授は今年42歳になる。だから、「生まれて気づいた時から、商店街はずっとシャッター街」だった世代だと自身の記憶を語る。

一方で上の世代には賑わっていた頃の商店街の記憶があり、「そこに戻る」ことが活性化としがちなが、その下の世代にとっては、「次に行く」「新しいまちを作る」ことが活性化なのでは、というのだ。

同じ活性化という言葉掲げるが、違うゴール

※1 国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座 2015年に福武教育文化振興財団と福武財団の寄付により、岡山大学に設置された寄付講座。岡山市出身の洋画家・国吉康雄の研究と顕彰活動。作品を使用した鑑賞モデルの開発など、「あるものを活かす、新しい価値を生み出す」をモットーに、様々な地域文化芸術資源を活かした教育・研究・発言活動を、学生・地域と共に。岡山県より第20回岡山芸術文化賞。岡山市より第46回岡山市文化奨励賞を受賞。

※2 五城目町 秋田県南秋田郡五城目町。「五城目町市」で知られ、近年は古い商店や廃校を活用し、移住者や起業家、アーティストが地域住民と交わりながら新たな活動を生み出す。地域再生の取り組みでも注目される。その一方で、町の公式サイトによると人口は、2026年6月末現在で4,600人。2020年の国勢調査では8,538人。1008人約12.6%の減少となっている。工藤准教授は五城目町地域活性化支援センターに研究室を設置する。

※3 なまはげ 秋田県男鹿半島に伝わる無病息災や豊作を願う来訪神の民俗行事。大晦日の晩、鬼のような面をつけ、黒い衣装をまとった若者が家々を訪れ、「泣く子はいねが」となごみと大声を上げて怠け者や子供を戒める。2018年にユネスコ無形文化遺産に登録された。

※4 地域おこし協力隊 人口減少地域へ移住し、自治体の委嘱を受けて、地域産業の振興、観光、農林業、住民支援などに取り組む制度。任期は1〜3年で、活動後の地域への定住・定着を目的とする。

※5 サステイナビリティ学 社会・環境・経済の持続可能性を、分野を横断して考える学問。

※6 朝市 生産者らが野菜・山菜・魚などを持ち寄って売る。定期市。五城目町では週りに市が立ち、500年以上続く。

※7 自己効力感 心理学者アルバート・バンデューラ(1925-2002)が提唱した概念。「ある課題や状況に対して、自分はいまう行動を遂行できる」という自分の能力への信念・見込みのこと。

※8 アフォード「環境が主体にある行為を可能にする性質」を指す。「affordance」の語源でもある。

※9 限界集落 1980年代後半から高知県の山村を継続調査した大野晃氏(当時・高知大学教授)が、高度経済成長期以降の若年層流出と林業の衰退、集落の高齢化、道路管理や祭礼、冠婚葬祭など、共同作業の維持困難が急速に進む僻北地域の状況を、単なる「過疎」では説明できないと考え、人口の半数以上が65歳以上となり、共同体としての暮らしの維持が難しくなった集落を「限界集落」と名付けた。



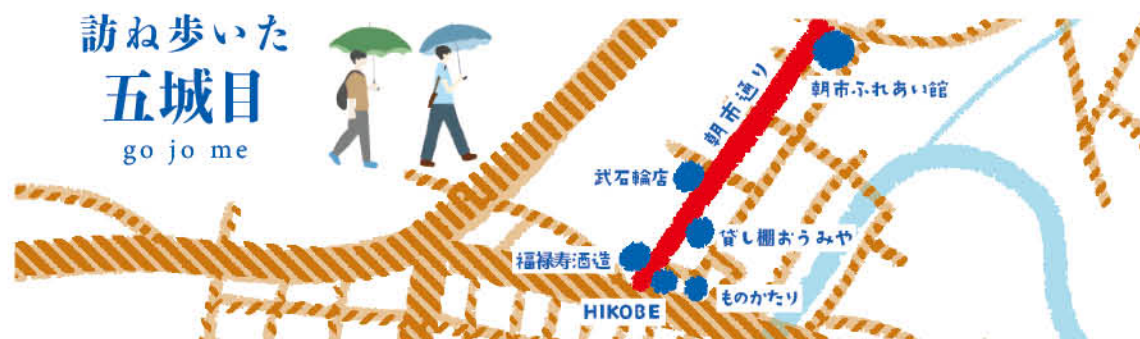
を指している。当然、意識もずれてしまう。

その一方で、若い世代に任せるからと「手を引く層」に対しては、「引退しないでください」と工藤准教授はいう。人口が減っていくなかでは、全員参加でなければ、地方は立ちゆかないという現実認識からだ。

松浦理事長は、地域の課題解決やまちづくりというような現場で、「実際やるのは現役世代で、上の方はそのサポートがいいのか」としながら、今はその逆で、下の世代が、ついていくような構造になっているとも指摘し、それを「変えたい」と考えていると話す。

こうした構造の課題は、二人が議論した、都市と地方のそれにも見られる。

工藤准教授は、地方の将来像は都市の側から語られるものだったという。地方はこういう風になって、こうやって振興していくというように。だが、「地方は地方で自分たちがこんな風に暮らしたいっていうことの積み重ねで面白くなっていく。面白くなったからみんなが集まってくる」



訪ね歩いた 五城目 go jo me

文・写真 才士真司

朝市通りを歩いて — 五城目の場を訪ねる —



一 ひこべえ (HIKOBÉ)

「森山の水で醸した酒を、この町の風土と味わう」場だという。

『下町醸し室HIKOBÉ』。1688年創業の酒蔵・福祿寿が、かつてタンス屋だった建物を改装し、2018年にオープンしたメーカーズショップでもある。店の前後を挟むガラス壁と吹き抜けの天井、木質の手触りが居心地の良さを演出する店内には、清酒や小物が並ぶ。

ここで小熊さんがリードし、工藤准教授が補う形で、この10年の話が語られる。通りには、福祿寿の酒蔵がある。全国では、こうした古い蔵を、ホテルやレストランに転用する例も少なくない。五城目町でも、その活用について議論はされてきたが「その正解を急がない」としたのだという。朝市の出入り口に立つ、いわば公共の場としての性格もある蔵を、どう使うか。答えは「先延ばし」にして、その間に「この町にいま必要なものと一緒に耕していけばいい」という判断があったのだという。

「耕す」という言葉が、「まちづくり」を考える場に馴染むのも、昨日の対話を踏まえると納得がいく。この「耕す」ことの成果だろう。界限にはこの10年で、20件を超える取り組みが生まれている。興味深いのは、一つの「大きな主

秋田での取材、二日目。取材チームは、実際に五城目町の朝市を工藤准教授と訪ねた。その日は「市日」だったが、残念なことに昨日からの雨の勢いが増し、市の出店者はまばら。

朝市の通りを歩くと、ギャラリー、宿屋、シェアスペースなど、性格の異なる新しい場が、さして広くない区画に点在している。そのあり様に、昨日の工藤准教授の言葉を思い返した。

「ものごと」が「もこもこもこつ」と立ち上がること。その積み重ねがあつてこそなんだと。

この日、案内をしてくださるという人物と朝市の入り口近くに立つカフェ、『下町醸し室HIKOBÉ』で待ち合わせたのが、店内で妙な声のかけられ方をする。「ご無沙汰しています、才士さん」と、声をかけてくれたのは小熊隆博さん。2013年の「瀬戸内国際芸術祭」でともに働いた方。瀬戸内のアート運動を知る小熊さんとの予期せぬ再会に驚き、小熊さんの故郷がこの町と聞き、さらに驚いたのだが、それはまた別の機会の話となる。

取材チームは、そんな小熊さんを囲んで、席につく。

体」が、それらを計画的に配置したわけではないということだ。誰かの試みが別の誰かの思いを刺激し、そうした小さなチャレンジが面的に広がってきた。そんな一つが、小熊さんが開いたギャラリー、『ものかたり』だ。

何をやるかは決まっていなかったが、自分で何かに挑めるとは思っていた。そのくらいの、ふんわりとした構えで戻ってきたのだ、と本人は振り返る。

2016年に築100年以上の空き家を改修して開いたギャラリーは、展覧会や絵本販売、ワークショップなどを通じ、アートと地域の日常が出会う場を育てている。

急がないこと。人が人を呼ぶこと。うまくいかない時があること。1杯のコーヒーと共に聞いた話は、この町がゆっくり育ってきた、その速度のようなものだった。

二 貸し棚おうみや

通りを進み、次に案内されたのは「貸し棚おうみや」。ちょうど、親子でアートワークショップを楽しむ姿が見られた。

『貸し棚おうみや』は、五城目朝市通りにあつた築80年ほどの店を改修して生まれた、座敷や台所もある交流拠点。壁面の棚を町の人が借り、本やお気に入りの品を



「ものかたり」の中に広がる空間を眺めて、小熊さんに「直島での経験って活きてます？」と、ふと尋ねた。すると、「生きてますね」と、言葉が返る。そうした人々たちを、他の土地でも私は知っている。



HIKOBÉ店内の様子

朝市を目当ての観光客、近在の住人たちが、強くなっていく一方の雨足を気にしながら、店内に溢れる五城目の逸品に手を伸ばしていた。



小熊隆博さん

五城目町に育った小熊さんは、約7年、「ベネッセアートサイト直島」の運営に携わり、2015年にUターン。アートや表現を通して、「地域を別の見方で発見し直す」活動を行なう。



「五城目朝市」は約530年続く露店市。旬の食材や生活に密着した商品を販売し、天気に恵まれれば多くの出店者と地域・遠方からの客で賑わう。通常の朝市は「2・5・7・0」のつく日に開催され、週末に開催日が重なれば「朝市plus+」の日となる。



雨の朝市通り～前日に訪ねた文化施設で、雨天での朝市の開催について話題になった。施設のスタッフは「多少の雨でもやる。朝市は暮らしのためだから」といった。ただ、想定を超える雨だった。



柳澤龍彦さん
IT系の企業に勤務の後、2014年に地域おこし協力隊として五城目町に着任、移住。人と場所、教育、事業をつなぎ、活動の発生と継続、マッチングをプロデュースする。

町の拠点だ。教室をオフィスとし、起業家やクリエイター、地域おこし協力隊、工務店教授のような研究者など、多様な人々が活動する。地域に根差した挑戦を「土着ベンチャー（ドチャベン）」と呼び、起業支援に加え、研究、アート、教育など、分野を超えた交流と共創を生み出す。

そんな組織を切り盛りする柳澤さんは、印象深い言葉を私たちに示す。

「朝市通りが小学校みたいだね。あそこもここも教室だと、勝手に思っている」

『武石輪店』の壁で、町の人と作家が1枚の絵を描いた。酒を介して風土について学ぶカフェもある。おうみ屋のあり方はまさしく教室だった。

柳澤さんの「あそこもここも教室」という表現は、比喩というより、この通りの見取り図のようなものだ。

町では5年前、七つあった小学校が一つに統合されている。その改革の際に3年をかけて10回の住民参加ワークショップが開かれた。そこで住民からの、「子ども大人も学び合う」という言葉をコンセプトに発展させたとき、これを「どう地域に根付かせるか」という課題があった。この日、訪ね歩いた場所は、学校が地域に出た、ひらかれた、地続きのものであったのだ。こうした学びに対する態度、姿勢、それをよしとするシステムが、また、町に人々を呼んでいる。

紹介したり、ちょっととした「商い」を試せたり、洋裁、ウクレレ、料理と、趣味の集まりや、コンサートや交流会、学生の研修の場など多様な活動が生まれている。

「まちなかのリビング」を目指す運営者は、社会福祉士でもある八嶋美恵子さんだ。

町のまちづくり課と業務委託を結んだ集落支援員で、戸別に家を訪ねる活動のかたわら、こうした居場所づくりも仕事の時間に含めてよいとされているとのこと。

「ここは稼ぐための場ではない」と、八嶋さんはいう。

住民がイベントに使うときの会場費が一日1000円ほどだが、それでは光熱費にも足りない。これを支えるのは、県からの委託や教育プログラムなど。「地域の場」を維持するための負担は、地域だけに求めず、外から持つてくる仕組みも整えられている。

『貸し棚おうみや』での話で印象に残ったのは、居場所どうしが必ずしも混じり合わないという点だった。『貸し棚おうみや』は地域に開かれていて、病気の話など、センシティブな話はしにくい。一方で、通りにある別の店では、つらい話などでもできる場になっているという。居場所として、それぞれに役割があり、だからこそ人は、その日の過ごし方、あり方で行き先を選べる。



八嶋美恵子さん
シカゴに生まれ、大学で福祉を学んだ八嶋さんは、2021年に、「地域医療への強い思いを持つ夫」と共に五城目に移住。高校生・大学生を対象としたフィールドワークや対話型研修、Well-Being、医療・福祉などをテーマとする教育事業の展開や集落支援業務を担うなど、対話と交流の場をプロデュースする。



貸し棚おうみやの表に貼り出されたイベントの案内。店内ではアートワークショップを親子が楽しんでいた。

均された共同体ではなく、性格の異なる場が併存していること。それが、この界隈の居心地を支えているように見えた。

この日、三つ目の場所は『武石輪店』。その名が示すように、かつては自転車を扱う商店だった。いまは、その名を残したまま、家具職人や学生、アーティストを町に迎える場として使われている。まず、目に留まったのは、まだ真新しい木質の壁一面に描かれた画だ。

2025年、美術家・永沢碧衣さんが滞在制作した壁画だ。永沢さんは、町の人々が持ち寄った動物の写真などをもとに、五城目の象徴・森山と地域の生きものを、町の人々と共に描いた。このエピソードに、直島の家プロジェクト「角屋」を巡る物語を思い出す。

『武石輪店』は店の記憶を残しながら、新たな人々、表現が交わる場へと再生されている。

ここで話を聞かせてくれたのは、五城目町地域活性化支援センター館長の柳澤龍彦さん。

五城目町地域活性化支援センター、通称「B&B BASE」は、廃校となった旧馬場目小学校を活用することで、2013年に町が開設した、地域づく

三 武石輪店

通りに出ると、より一層、雨は強く、旅の先行きを不安にさせたが、よい学びの機会に触れた充実感に心は満たされていた。どの場合、居場所であり、交流の場であって、学びの場であった。その境目はゆるく、それぞれに取り組みが交差している。

教育や文化に投じたものが、巡り巡って地域に返るというあり方。

その考えは、財団が岡山でこの40年続けてきたものと、遠いものではないと、いく先々の場所話聞きながら思った。ここで見たのは、完成を見た成功事例ではない。誰かが「やってみたい」といったとき、その一歩を受け止められる場が、少しずつ増えていく。その積み重ねの途上に、この町はいる。

歩き終えて

※1 福徳寿の酒蔵 福徳寿酒造の上酒蔵・下酒蔵・事務室・住宅は、1996年に国の登録有形文化財に登録された。

※2 角屋 香川県の直島で1998年に始まった「家プロジェクト」の第1号。本村地区の約200年前の民家を修復し、現代美術家の宮島達男の「Good Time, 98」などを設置した。この制作には、5歳から95歳までの島民125人が参加するなど、住民が作品の成立に直接関わることで、現代アートと島の日常を結びつけ、その後の家プロジェクトの方向性を示す重要な起点となった。

40周年記念事業告知

40年の歩みから、岡山の未来を考えるシンポジウムが11月、岡山大学「J」ホールで開催！

公益財団法人福武教育文化振興財団設立40周年記念シンポジウム

「40年の物語～『いいね』という『声』が『文化』を育んできた」

「いいね」という、地域の小さな、そして多くの声に背中を押され、育まれてきた福武教育文化振興財団。その設立から40年を迎える今年、岡山県・伊原木隆太知事、岡山大学・那須保友学長、福武教育文化振興財団・松浦俊明理事長が、「これまでの歩み」と「これからの岡山」について対話します。教育と文化を軸に、環境・経済・社会が調和する豊かな岡山について、市民、学生、教育・文化に携わる皆さんとともに考えるイベントです。

主催 公益財団法人福武教育文化振興財団

日時 2026年（令和8年）11月15日 @ 13:00～16:00

会場 国立大学法人岡山大学 鹿田キャンパス ジュンコフタケホール

武石輪店内の壁画の前に語り合う一同
壁画の作者の永沢碧衣（ながさわ あおい）さんは、秋田県出身で秋田公立美術大学を卒業。マタギ文化を徹底取材し、クマの膠を作り、利用するなど「記憶の痕跡」を制作に取り込む。地元のTV局の取材にも、この壁画は、「町に住む方々、通りを通る方々と一緒に作り上げた」と答えているが、朝市通りの記憶、木材の町としての記憶、町と共に歴史を刻んできた自然・生物の記憶の集積作品でもある。



福武哲彦ものがたり

【第二話】教育の原点

マンガ：あさのい

福武教育文化振興財団は福武哲彦（福武書店、現ベネッセコーポレーション、初代社長）の遺志を継いで福武総一郎が設立しました。設立40周年を迎えるにあたり、福武哲彦とは一体どのような人物だったのか。その原点に触れてみたいと思います。

昭和10年、師範学校を卒業した哲彦の最初の赴任先は

自然豊かな吉備高原の真只中にある大和小学校

最寄りの駅からは約10キロ、バスも通らぬ場所…

まあ、あの成績では

文句も言えまい

当時の師範学校の軍国主義的な教育体制に反発し、散々な成績で卒業した哲彦だった

しかし小学校に着くと…

先生っようこそ～!!

師範学校から若い先生が来て下さった

村の宝じゃ

いよいよ始まった教師生活

哲彦の授業は、教室の中には収まらなかつた

自然の中で

のびのびと育てる

あれだけ嫌った教師の仕事だったが

うわっ

子どもってこんなに可愛いものだったのか…

そう実感する毎日だった

大和小学校での3年間は、哲彦の教育への情熱の原点となり

後の「進研ゼミ」や「進研模試」の創設へとつながっていくのであった

でも体は土に還る

新しい命につながっていくんだよ

先生…
雀さんが
死ん
じやった

もう
戻らないの？

そうだねえ

あさのい 1985年千葉県生まれ。岡山県倉敷市を拠点にマンガやイラストを描く。奈義町での生活を綴ったマンガ「こんにちは、なぎさんや、長島愛生園に通う中で」を描いたマンガ「こんにちは、愛生園」など、webにて更新中。

私たちの 福武書店 青春期

— 哲彦社長に
思いを馳せて —

福武書店（現ベネッセコーポレーション）の元社員である齋藤福子さん（1971年入社）、石原節子さん（1971年入社）、黒崎秀子さん（1972年入社）の3名が、在職当時の思い出や福武哲彦社長の人物像について語り合いました。「みんなで手作りで会社を大きくしていった」高揚感が伝わるお話でした。



入社から55年以上を経た今も、当時の写真は大切に保管されていました。テーブルに広げれば、話はいつまでも尽きません。今でも当時のメンバーで同窓会を開くそうです。

※お名前はいずれも在職当時（旧姓）で表記しています。

福武哲彦社長は

「新しいもの好き」で
「チャレンジ精神旺盛」で
「社員思い」でした。

齋藤 福子^え

高校の恩師の勧めで入社。最終面接は福武哲彦社長が行ってくれた。通信教育部の庶務会計に配属。在職期間は約2年（休職期間を含む）。哲彦社長の第一印象は「身近なおじいちゃん」「非常に優しい社長だった」「孫のように接してもらった」と語った。「職場はとにかく楽しくて、学校の延長みたいだった」と回想した。



石原 節子^え

高校卒業時、出版社で働きたいと考えて入社。齋藤さんと同期であり、最終面接で福武哲彦社長から「来るか」と声をかけられたことが入社を決めた手となった。通信教育部の会員管理を担当。在職期間は約2年。退社後に遊びに立ち寄った際、生まれたばかりの長男を孫のように抱いてあやしてもらったことを懐かしがった。



黒崎 秀子^え

大学卒業後、中学校教諭を経て入社。親類の結婚式で哲彦社長（仲人であった）から声をかけられ入社。在職期間は約4年半。哲彦社長の印象は「厳しい人。一度社会を経験してからの中途入社だったからかも」と。退職を申し出た際「来月ボーナスだからもう1カ月動めてから辞めなさい」と気遣ってもらった」と振り返った。



仕事には厳しかった哲彦社長だが、慰安旅行や運動会などの行事を大切にし、普段は見せないくつろいだ表情をのぞかせた。



1970、80年代の福武書店。仕事も行事も、社員みんなの手でつくっていた。（右）石原さんのご長男を抱く哲彦社長。



新しいもの好きのZD運動

「ZD運動って言って、ゼロ・ディフェクト運動っていうのがあったんですよ。哲彦社長が新しいもの好きで、電話は3分以内にまとめて話せるようにって、電話機の横に砂時計を置いてあって、ピッとひっくり返してね、その間に用件をまとめる練習をさせられたんです。あと鉛筆とかボールペンも、短くなるまでちゃんと使い切らないと総務が新しいのをくれないうんですよ。もう儉約、儉約でね」



みんなで
コンピューター
を勉強

「コンピューターが入った時は、学校の教室だった一部屋を丸ごとコンピューター室にしちゃって、そこで全員習わされたんです。二進法から始まって、コボルってやつでね。もう何のことやらさっぱりわからなかったんですけど」

退職でなくて「休職」で

「病氣しちゃって辞めますって言ったんですけど、そしたら哲彦社長が『休職にしたらええから、辞めんでもええよ』って言ってってくれて。それでしばらく、休職のままにしてくれたんです」

表紙イラスト、封入も自分たちで

「『チャレンジ』の表紙も社員が描いてたんですよ。封入も全部自分たちでやって、中央郵便局まで持って行くのも社員でね。もう全部、社員の手作りでやってたんです」

総出で発送作業した後は

「赤ペン先生が添削したのを会員のみんなに送り返す日っていうのが決まってる、それはもう一大イベントだったんですよ。編集の人も総務の人もみんな総出でやって、しかも3班に分かれて競争みたいにしてね。それが終わったらケーキが出るんです。部長が課長が買ってきてくれて、お疲れさんって」



パンフレットのモデルに

「英語で岡山一、二を争う同僚がいて、カセットテープを使ったヒアリングの会員制度を企画したんです。時代的にはずいぶん早かったと思いますが、哲彦社長はGOを出して。募集パンフレットのモデルは私がやりました（右が当時の写真）。入社の数年前まで高校生で、都合が良かったんでしょう。結局会員が集まらず、早々に終わっちゃいましたけど」



制服は 好きな色を

「制服には冬と夏があってね、夏の制服がオシャレでね。ピンクとブルーと黄色から好きな色を選べたんですよ。週に1、2回は私服の日もあったんです」

福武書店とは



福武哲彦が1955年に岡山県で創業した出版社です。生徒手帳や高校入試問題集などの発行を開始しました。その後、通信添削講座「進研ゼミ」や「こどもちゃれんじ」を柱に事業を拡大し、文芸誌「海燕」なども刊行。1995年に社名をベネッセに変更し、現在の株式会社ベネッセコーポレーションへと発展しました。岡山で生まれ、70年を超える歴史を積み重ねてきた教育・出版分野の企業です。

僕が、活動をはじめた理由

全ての原点は、小学校の特別支援学級の担任経験でした。子どもたちの将来の選択肢の少なさに危機感を覚え、障害者雇用の実務（採用・キャリアコンサル・運営等）に3年間携わった後、「学校教育から変えたい」と特別支援学校の教員へ転身。現在、再度教育業界に戻って8年が経ちました。

このような中でどうしたらもっと社会と当事者が自然に歩み寄って、互いに認め合うことができるのかと考えていました。それが娘とのある出来事で、その答えが「食」ではないかと気がついたのです。普段、僕は夕飯作りを家でしています。それを見ていた娘が「私もやってみたい」と興味を持つようになりました。5歳のとき卵焼きの作り方を教えると、真剣な顔、できたときの嬉しそうな顔を見せ、「今度は親子でつくろ！」と自信に満ち溢れていました。

食事を作ることは、学校が目指す「生きる力」が凝縮されているのではないかと、特別支援学校の子どもたちとも調理学習をしました。すると、普段関わらない子どもたちが気負わず自然と言葉を交わし、切磋琢磨する姿が見られたのです。これだ！

障害当事者を含めたこのような場を地域社会に創っていききたいと思い、共に台所に立つことで自然と会話が生まれる「自炊」の普及活動を始めました。2025年から多くの方と出会い、習慣づくりを重ねてきました。その積み重ねを活かし、今年は「自炊」+「子ども食堂」の自炊体験型子ども食堂「おなかまキッチン」を始動しました。この場では障害当事者が子どもたちの調理を手伝う側にまわり、支えられる場から支える場へ変わっていきます。また、多様性のある人たちとの関わりは、お子さんにとっても新しい出会いと学びになります。そして、このおなかまキッチンでの子どもたちの経験は、社会と当事者が歩み寄る大きな一歩。「食」の力で、真の共生社会を創っていきたくわくわくしています。

「食」の力で

真の共生社会を創出

文・石井 恒平
キャリア形成支援プロジェクト
TUCURU 代表

キャリア形成支援プロジェクト TUCURU

自炊実践型子ども食堂「おなかまキッチン」を月1回実施し、障害当事者が子ども食堂を実施することで地域を支える側になると同時に、地域の孤立も解消する場を創出する。誰もが多様性を認め合い、自分らしくイキイキできる社会をつくるを掲げ活動している。



一品持ち寄り自炊実践会の様子



おなかまキッチンの様子

私は小さい頃から絵を描くことが好きで、大学卒業後は展示や自らイベントを企画したりしながら創作活動を続けてきました。約2年前に西栗倉村へ移住し、「自分が描くだけでなく、人にも教えてみたい」と思うようになりました。それまでは、自分が描きたいから描く創作活動が中心でした。

しかし、培ってきた経験や技術が、誰かの「描いてみたい」「やってみたい」という気持ちにつながるのであれば、自分の「好き」や「得意」を人のために生かせるのではないかと考えるようになりました。

児童の保護者の方から相談をいただき、子ども向けのお絵描き教室やデッサン講座を始め、活動の幅が広がっていききました。その後、部活動の地域展開をきっかけに、クリエイティブな活動をしている仲間とチームを組みました。話し合いを重ねる中で、「子ども

「好き」や「得意」を 持ち寄りつながら

文・具志堅 詩織
skilloop 実行委員会

skilloop 実行委員会

世代を問わず専門技術やもののづくりに触れる機会が限られている地域において、基礎講座やワークショップを通じ日常的に創作へ関われる環境を整える。仲間と共に「自分たちで生み出す」文化を育み、学びと実践の場を創出するとともに、専門性を持つ人が地域内で活躍できる環境の醸成を目指す。

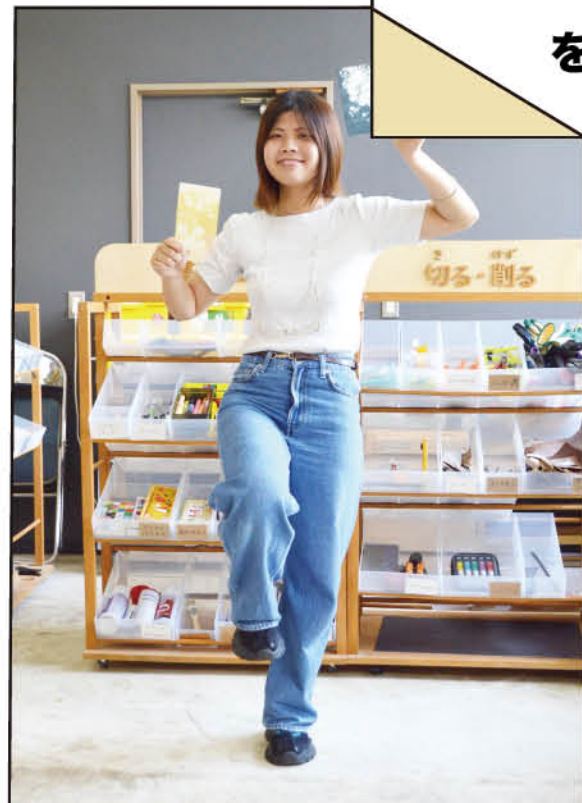


スキループ・クラブ プログラミングコースの様子



スキループ・クラブ 建築コースの様子

ものだけでなく、大人も子どもも地域も関係なく、誰もが『好き』や『得意』を持ち寄り、それが誰かの新しい挑戦につながる場をつくりたい」という思いが生まれました。こうして誕生したのが「skilloop（スキループ）」です。名前は、「誰かの得意（スキル）や好き（スキ）が誰かの役に立ち、そのつながりがループしていく」という願いを込めています。



私が、活動をはじめた理由

妹尾 真由子
SENOO Mayuko

1986年矢掛町生まれ。2013年に矢掛町役場に入庁し、産業観光課で観光・商業・雇用など全般を担当。また、ご当地キャラクター「やかっぱー」の初代お姉さんも務めた。2018年から岡山県フィルムコミッション協議会の専任スタッフとして、映画やドラマ、CMなどのロケ誘致から支援、プロモーションを担当し、県内全域を日々飛び回っている。



妹尾 真由子さん

「作品を入り口に岡山を知る人を増やし、地域の若者が自分たちの町の魅力を、自分の言葉で語れるようにしたい」と、妹尾さんは今後の展望を語る。



取材・文 森分 志学

映画の撮影で訪れた岡山が、「また会いに来たい」場所になるなんて。

目的や日時を説明し、問

妹尾さんは、岡山県フィルムコミッション協議会の専任スタッフとして、映画やドラマ、CMなどのロケ誘致から支援、プロモーションを担当し、県内全域を日々飛び回っている。

妹尾さんは、岡山県フィルムコミッション協議会の専任スタッフとして、映画やドラマ、CMなどのロケ誘致から支援、プロモーションを担当し、県内全域を日々飛び回っている。

フィルムって
コミッションって
一体なんだろうか。

矢掛町出身の妹尾さんは、歴史ある矢掛の町並みに関心をもち、奈良の大学でまちづくりや観光学を学んだ。卒業後はアルバイトをしながら、地元で家族の勧めで矢掛町にいた。家族の勧めで矢掛町にいた。家族の勧めで矢掛町にいた。

題が起こりそうな場所には事前に入り、制作側と地域の間



岡山スケッチ vol.8

それぞれのテンポで

文 ピアニスト 中桐 望

6月上旬から、小学1年生になった長男と毎朝一緒に学校まで歩いている。

片道30分。6月は涼しい朝も多かったが、7月に入ると朝から汗だくで、私は帽子の上からUVパーカーをすっぱりかぶり、もはや誰だかわからない格好で登校の列の後ろを見守りながら歩いていく。

まっすぐ歩けない日もある。前の子との間が空いてしまったり、急に立ち止まってしまいう日もある。「みんなと同じように歩けないのだろうか」と、つい焦ってしまう朝もあった。

音楽を教える仕事をしていながら、我が子のことになると「待つ」ことがこんなにも難しいなんて。レッスンでは「大丈夫、焦らなくていいよ」と言っているのに、自分のこととなると話は別。早くみんなと同じようにできるようになってほしい。そんな気持ちが顔を出すこともあるけれど、子どもには子どものテンポがあるのだ。

夏はピアノのコンクールシーズン。

レッスン室でも、いつもより真剣な表情でピアノに向かう子どもたちを見ながら、同じようなことを感じていた。

譜読みが早い子、一つのフレーズを自分のものにするまで時間がかかる子、本番直前になってぐんぐん成長する子もいれば、ゆつくりと階段を上るように力をつけていく子もいる。子どもの成長は、大人が思うようには進まない。

努力が実を結び、花開くタイミングも、本当にそれぞれ。良い結果が出て歓喜するときもある。思うような結果が出ずに悔し涙を流すこともある。私自身、これまでの音楽人生の中で、そのことを何度も何度も経験してきた。だからこそ、起こることにきつと意味があり、速回りに見える時間にも決して無駄なことはないと信じている。

子どもたちがそのことに気づくのは、きつとずっと先のこと。そう思いながら、ただひたすら見守り、彼らの背中にエールを送る。

通学路に響く足音も、レッスン室に響くピアノの音も、それぞれが自分のテンポで、前へと進んでいる。

秋には長男はどんな足取りで学校へ向かっているだろう。コンクールに挑戦した子どもたちは、どんな音を奏でているだろう。

子どもたちを見守るつもりが、実は私の方が大切なことを教わっているのかもしれない。

信じて待つこと。その難しさと尊さを、子どもたちから学んだ夏だった。

中桐望 NAKAGIRI Nozomi
岡山市出身。東京藝術大学音楽学部、同大学院修士課程をともに首席で卒業。修了。日本音楽コンクール第2位、浜松国際ピアノコンクール第2位などで注目される。
2014年よりポーランドで研鑽を積み、ショパン作品に特に優れた演奏を示したピアニストに贈られる日本ショパン協会賞の受賞をはじめ、岡山芸術文化賞・グランプリ、福武文化奨励賞、エネルギー音楽賞、マルセン文化賞など多数受賞。現在は岡山を拠点に国内で演奏活動を行う。

福武教育文化振興財団生みの親

哲彦さんが愛でたもの

夢の手触り

写真・文 久延将太

表紙の写真は、福武トレス「L Gallery」の一角に置かれた、福武哲彦氏が自宅で愛用していたイームズ・ラウンジチェアです。

哲彦氏が亡くなった年、半世紀を超える交友があった

た谷口澄夫氏（初代福武教育文化振興財団理事長）が新聞に寄せた寄稿文には「哲彦氏は大ぶろしきを広げることもしばしば」「私に語っていた壮大な夢はまだこれからだった」とありました。娘の美津子さん（福武トレスオーナー）もまた、哲彦氏を「とにかく大いに夢を語る人だった」と振り返ります。

どうやら福武哲彦とは、内も外もない境界知らずのドリーマーだった模様。そして「L Gallery」もまた、境界のない空間でした。

全面ガラス張りの建築に一歩足を踏み入れると、ここは建物の中なのか？ 森の中なのか？ ふわふわとした浮遊感に包まれ、身体の細胞が戸惑うような、夢心地のような感覚を覚えます。



この謎を解く鍵は、屋根、床、ガラス、針葉・落葉・常緑樹の配置など、境界を曖昧にするためのこだわりが随所に散りばめられていることにありました。

「L Gallery」を構成している柱の太さは直径38mm。これは建物を取り囲む木々の太さの平均であり、さらに柱の数は雑木の数355本とほぼ同数の358本。

この一体感がそのままガラスや床に映り込み、多重露光のように溶け合っています。

風が吹き、葉が揺れ、光が揺れ、影が揺れる。そこにそっと置かれたイームズチェア。揺らぎの中、揺らがないその佇まいが、空間だけでなく時間の境界もほどこいていくようです。「かつて」「そこにあつた夢が、今まさに」広がるような。

夢とは一体何なのか、夢の中に飛び込んで、夢の一部に触れてみる。そんな体験がここには満ちています。

久延将太 H-SANOBU Shota
1980年岡山市生まれ。多摩美術大学で写真・映画を学び、赤磐市是里の山の上にて久延ファミリーでヒガン企画合同会社を営む。何とも言えない気持ちと情熱が「らしく」伝わる媒体を制作している。



福武トレス

岡山市北区の半田山の中腹にある福武家ゆかりの雑木の自然風庭園。

数寄屋造り・現代建築が響きあう空間。開園日：金～日 寒不定休あり 完全予約制

編集後記

◆全国的にも珍しい地上を走る秋田新幹線に乗って、片道約7時間をかけて秋田へ向かいました。盛岡を過ぎると、とたんに速度が落ち、踏切や田んぼの広がる景色の中を走り抜けるという不思議な体験。◆工藤先生と松浦理事長との対談の舞台は、旧泉立美術館を改修した秋田文化創造館。藤田嗣治の大壁画「秋田の行事」を展示するために設計された大空間は、丸窓から光が降り注ぎ、曲げわっぱの天井装飾も相まって、新しさと懐かしさが同居する温かな場所。市民が集う理由もわかる気がします。◆2時間近くの前談の中で、工藤先生は「風土」「ものさし」という言葉を繰り返し口にされ、その土地に合った独自の価値基準を作り直す大切さを語ってくださいました。数字や効率だけが、価値を測るものさしではない。そう思わせてくれる言葉です。◆翌日訪れた五城目町は、秋田駅から八郎湯方面へ車で40分。車窓に広がる田園風景は圧巻。多い日で約7,000人が来場する「ごじょうめ朝市plus+」は、あいにくの大雨で中止でしたが、それでも爽り多い秋田出張でした。◆さて、6月には、芥川賞作家であり第1回福武文化賞を受賞された小川洋子さんの書下ろしエッセイなどを収めた「40周年記念誌」を刊行しました。先着100名様に記念誌を差し上げますので、ご希望の方は財団までお問い合わせください。（W）

機関誌「ふえき」
読者アンケート
ご協力ください。

▼アクセスは
こちらから



公益財団法人 福武教育文化振興財団

人づくり、地域づくりを応援します

〒700-0034 岡山県岡山市北区高柳東町9-1 株式会社ベネッセコーポレーション高柳別館1階

TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190 URL <https://www.fukutake.or.jp/>

E-MAIL eczaidan@fukutake.or.jp



福武教育文化振興財団
ウェブサイト



コミュニケーション・マガジン
and F | アンドエフ



教育文化活動助成
成果報告書アーカイブ

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

機関誌 **不易**

vol.91 2026.9.25

編集・発行 公益財団法人 福武教育文化振興財団
制作 株式会社吉備人
デザイン 久延 フミカ（ヒガン企画合同会社）
印刷 研精堂印刷株式会社